2023 年 2 月 18 日（土）
第 31 回加藤周一文庫公開講読会「『羊の歌』を精読する」@立命館大学　平井嘉一郎記念図書館

「内科教室」

報告者：西澤忠志

1. 梗概

本章は、加藤周一が 1943 年から 44 年までの、東京帝国大学医学部卒業後、医局に勤めていた 24 歳から 25 歳の時期に、彼が「身近」な存在、「疎遠」な存在と感じた人々とのかかわりが対比的に綴られている。まず、医局の中で「身近」な存在として挙げられているのは、医局の先輩である中尾喜久と三好和夫である。中尾と三好は加藤が幼少期から慣れ親しんでいた「科学」的な考えを徹底し、観察を通じて慎重に事実を推論し、その対象を見抜くという方法を実践していた。こうした方法は、後の加藤が、ものごとを見る際の方法にも応用されることとなる。逆に「疎遠」と感じていた人が、「若い医者」である。彼との太平洋戦争の局面に対する見解をめぐる言い争いを通じて、加藤は自身の「いくさ」に邁進する同時代の日本社会への憤りを自覚するとともに、時と場合によって科学的な態度が豹変してしまう「知識人」の非一貫性に対する疑問を生むこととなった。この「身近」と「疎遠」との間にいたのが、「看護婦」と医局の外にいた人々である。加藤は「看護婦」との交友を通じて、当初は彼女に興味（好意）を持っていたが、それが彼の内部を変えることはなかったため徐々に疎遠になった。また加藤は、同時代の医局の外にいた人々とは、当初は隔たりを感じていた。しかし、東京大空襲での治療をきっかけに人々とのつながりを感じた。しかし、彼ら／彼女らとのつながりも一時的なものでしかなかった。戦中を通じてつながりを保っていたのは、加藤と思想を共有するごく一部の限られた人々であった。

2. 全体の構造

- 「二章ごとに関連のある話題が取り上げられている」という視点に従えば、

・「内科教室」…東京での体験
・「八月一五日」…軽井沢での体験
　→いずれも、**「近い」人々との交友、それ以外の人々との距離感**

- 『朝日ジャーナル』版との異同はほとんどなし…連載された時点からすでに「完成」された章
- 書誌情報

『朝日ジャーナル』9 巻 14 号〔1967 年 4 月 2 日号〕（1967）122-126 頁
『羊の歌』（旧版）200-211 頁、（新版）227-239 頁

※凡例
・以下の略字を使用する
「e.g.」…例えば、「∴」…ゆえに、「∵」…なぜなら、下線部は発表者によるもの
・今回、本文の後の説明の際、「３つの視点」をもとに整理する
① 「当時」の加藤周一（物語内の時代的文脈）
② 執筆当時（1967 年）の加藤周一（書かれた時代の文脈）
③ 現在の我々からの視点（加藤周一全体の活動から見た解釈）
・加藤の文章の部分は「丸ゴシック体」、発表者の見解については「**教科書体**」にて表記

第 6 パラグラフ（旧版 206-207 頁、改版 233-234 頁）

> 病室に住みこむようになって、私は看護婦たちの顔を覚えた。そのなかの一人は、彼女の当直の晩に――看護婦たちは交代で、二人ずつ当直し、夜どおし起きていた――田舎の生家からはこんできた白米や卵を使って、私のために夜食をつくってくれた。私は夜の看護婦室で、白衣の娘が消毒用のガスや水道を利用し、手早く、器用に、料理をつくるのを、感心して眺めていた。部屋の四方には、薬の棚や医療器具があり、病人の記録（それは「カルテ」とよばれていた、その頃の日本の医者は、ドイツ語、またはドイツ語に似た多くの術語を用いていた）が積み重ねられ、壁には黒板に白墨で患者の処置の予定表が書きこまれていた。また薬屋の広告用の暦もかかっていて、その大きな色刷りの写真は、富士の雪とか、平安神宮の桜とかといった種類の風景をあらわしていた。天皇皇后両陛下の写真や、活動写真の人気俳優の肖像を見ることはなかった。机には看護学教程といった風の本や、婦人雑誌のおいてあったこともある。その部屋は、一見したところ無秩序にみえた。しかし、しばらくそのなかにいると、一種の秩序がその雑然とした全体のなかからはっきりと感じられた。それは投げやりにされた混雑ではなく、それぞれのものが目的に応じて細心に配置された複雑さであった。机の上の花びんには、いつも小さな花が活けてあり、それが不思議に全体の空気をやわらげていた。料理ができあがると、私はひとりでそれを平げた。みずから用意したその夜食を、彼女が共にすることはほとんどなかった。あたかも私の家庭で、父や私が、家事に指ひとつ触れず、母と妹が万事をとりしきるのが、当然のこととされていたように。私はひとりの看護婦の好意と、好意にもとづく奉仕――にそれはちかいものであった――を、平然と受け入れながら、何ら彼女に報いる術を知らなかった。

① 「当時」の加藤周一

● 戦時中の東京帝国大学医学部附属医院の医療体制

・大島研三の回想

昭和 20 年頃の教室の写真を見ると、自分のほか 6 人ぐらいは女医さんなんです。女医さんばかりの教室でしたね。(……) 昭和 20 年に入ると、本土決戦にそなえて男は全部軍隊に入り、医局には男の医師はほとんどいなくて、教授と冲中先生と小林さん、中尾さんと、あと 1 人か 2 人の男の医師がいて、その他は女医さんだけになりました[1]。

→女性看護師によって、東大の医療体制が支えられる

「看護婦」が実際にいたかどうかは不明

② 執筆当時（1967 年）の加藤周一

● 「看護婦室」の描写

・全体の構造

最初…料理をつくる

中盤（「部屋の四方には～」）…「看護婦室」の描写

終盤（「料理ができあがると～私はひとりでそれを平げた。」）…料理を食べる

→「看護婦」が料理をしている最中に、**加藤がその工程とともに「看護婦室」を見回すような描写**

[1] 佐々貫之先生生誕百年記念会『佐々貫之先生生誕百年記念文集』（1989）9-10 頁

・「看護婦室」の対比的描写

A)　「仕事（公的）空間」と「私的空間」の対比

部屋の四方には、薬の棚や医療器具があり、病人の記録（それは「カルテ」とよばれていた、その頃の日本の医者は、ドイツ語、またはドイツ語に似た多くの術語を用いていた）が積み重ねられ、壁には黒板に白墨で患者の処置の予定表が書きこまれていた。

薬屋の広告用の暦もかかっていて、その大きな色刷りの写真は、富士の雪とか、平安神宮の桜とかといった種類の風景をあらわしていた。天皇皇后両陛下の写真や、活動写真の人気俳優の肖像を見ることはなかった。机には看護学教程といった風の本や、婦人雑誌のおいてあったこともある。

「私的空間」での暦の写真…自然の風景（富士の雪とか、平安神宮の桜）
≠権威のある人間（天皇皇后両陛下の写真や、活動写真の人気俳優の肖像）

Q.なぜ自然の風景なのか？

B)　「雑然とした全体」の中から秩序、「小さな花」を見出す

その部屋は、一見したところ無秩序にみえた。しかし、しばらくそのなかにいると、一種の秩序がその雑然とした全体のなかからはっきりと感じられた。それは投げやりにされた混雑ではなく、それぞれのものが目的に応じて細心に配置された複雑さであった。机の上の花びんには、いつも小さな花が活けてあり、それが不思議に全体の空気をやわらげていた。

→加藤が好意を持った人物への視点…詳細なものに[2]

- 『ある晴れた日』での「看護婦」（ユキ子）…「看護婦室」の描写はほとんど無し

③　現在の我々からの視点

- 「小さな花」…権力との対比的存在として書かれる

e.g.,「小さな花」

私は私の選択が、強大な権力の側にではなく、小さな花の側にあることを望む。（……）みずからを合理化するのに巧みな権力に対して、ただ人間の愛する能力を証言するためにのみ差しだされた無名の花の命を、私は常に、かぎりなく美しく感じるのである[3]。

→加藤が家族など身近で小さなつながりを重視したことにもつながる

---

[2] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』岩波書店（2018）258 頁

[3] 加藤周一「小さな花」『ミセス』261 号（1979）〔『加藤周一自選集 6』244-245 頁〕

● 「女性」表象の問題

e.g.，ヒルダ・シュタインメッツ…加藤自身の世界に入ってくるという感覚

> 窓から乗りだしてその後姿を見送ったときに、私ははじめて、私が彼女を愛しているということに気がついた。
> それは新しい経験だった。夜となく昼となく、私は彼女のことを考えた。その眼の輝き（……）すでに、想い出せばかぎりない過去があった。その過去は、（……）決してそこで終っていたのではなく、想像することのできるあらゆる未来につながっていた。私はみずから、私の世界の中心にひとりの娘、すなわち「他人」が入って来た、ということにおどろいた。世界の秩序は、そのために変わらざるをえない。そういうことは私の生涯にはなかった[4]。

e.g.，「看護婦」…医者／看護師、男／女の関係性は維持

> みずから用意したその夜食を、彼女が共にすることはほとんどなかった。あたかも私の家庭で、父や私が、家事に指ひとつ触れず、母と妹が万事をとりしきるのが、当然のこととされていたように。私はひとりの看護婦の好意と、好意にもとづく奉仕――にそれはちかいものであった――を、平然と受け入れながら、何ら彼女に報いる術を知らなかった。

→差別的関係だったことへの自戒[5]、**「看護婦」との距離感の表現**

第 7 パラグラフ（旧版 207 頁、改版 234-228 頁）

> 私はそれまで若い女が私に好意をもつはずはないと確信していた。またその確信を支えるのに、容貌風姿が見栄えせず、態度がいかにも無愛想で、みずから婦人の注意をひくに足りる何らの長所がないというにがにがしい反省もしていた。高等学校の学生であった頃から、私は同級生たちが喫茶店で娘たちと戯れる円転滑脱の態度に、感心もし、羨望も覚え、しかし彼らに相手にされるような工夫をこらすよりは、相手にされなくても暮してゆける工夫をこらしていたのである。私はそのときはじめてひとりの看護婦のなかに、女友だちを見出した。めだたない娘だったが、細かい心使いと優しい情があった。話し合うことは何もなかったが、病室が寝しずまったあとで、私たちは何かを話し合っていた。

① 「当時」の加藤周一

● 戦時中の加藤周一の女性関係は不明

（それまでに交友があったのは「日本郵船の船長の娘」、母、妹　少数に限られる？）

→初めて「看護婦のなかに、女友だち」を見出す

---

[4] 加藤周一『続　羊の歌』（旧版）119 頁

[5] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』岩波書店（2018）257 頁

② 執筆当時（1967 年）の加藤周一

● 「女友だちを見出した」という言葉…Q.どういうニュアンスがある？

（看護婦と女友だちになった、というわけではない）

・それまでの用例

① 「コンディヤックの感覺論」…「女友だち」＝対話によって思想をひき出す存在

パリの僧侶は、ドイツの哲学者〔注　カントのこと〕のやうに田舎町で星空を眺めながら道徳律を思案してゐたのではなく、女ともだちとの対話のなかから、その思想をひき出したのであり、おそらく星よりも女の瞳を見ることの萌芽多かったのである[6]

② 「芥川龍之介小論」…「女友だち」＝加藤に芥川龍之介を紹介した「日本郵船の船長の娘」

私は漫然と「夜来の花」の頁を飜しながら、もう一つの偶然がはじめて私に芥川龍之介を読ませた時のことを想ひ出す。

或る女友だちが、その頃東京の中学校に通ってゐた私に、「夜来の花」の読むに足ることを教へた[7]。

→いずれも、会話を通じて男性に思想的影響を与えた女性

執筆当時（1967 年）の「女友だち」＝何かしら影響を与えた女性

加藤が「看護婦」から「女友だち」を「見い出した」のは、何かしら影響を与えるのではという期待？

医局内での孤独の意識とよそ者としての意識によるものか[8]

※フランス留学中にも女性の「友だち」はいたが、「ほんとうの恋人であるためには、私たちのどちらも、充分に盲目的でもなく、充分に未来を夢みてもいなかったのであろう。[9]」

∴「友だち」≠「恋人」

ヒルダには「女友だち」の言葉は使われていない

③ 現在の我々からの視点

・加藤の「女性」観…「友だち」と「恋人」と、どう違ったのか？

---

[6] 加藤周一「コンディヤックの「感覺論」に就いて」『文学と現実』（1948）102 頁

[7] 加藤周一「解説」『夜来の花 再版』（1949）271 頁

[8] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』岩波書店（2018）258 頁

[9] 加藤周一『続　羊の歌』（旧版）109 頁

第 8 パラグラフ（旧版 207-208 頁、改版 235-236 頁）

> 彼女は内房の海辺の村から来ていたので、私はあるときその村へも出かけた。それは東京の爆撃のはじまる少しまえのことで、週末に世田谷の自宅へ帰るほかには、私が病院の外へ出ることは、ほとんどなくなっていた。内房へ向う電車に乗ったとき、私は周囲の乗客を、長い旅から帰ってきたときのように、一種の好奇心をもって見廻した。国民服の人々、買出しの人々、それぞれ何かの用事で忙しそうな人々……週末に海を見にゆこうという人間は、たしかに、私のほかにいるはずもなかった。私は突然よそ者としての私自身を、実に鋭く――あたかもその「よそ者」という言葉のなかに、私と社会との関係の一切が要約されてでもいるかのように、鋭く感じた。しかし彼女は、もちろん、よそ者ではなかった。海辺の村の売店も、畑のなかの道も、松林も、潮の香りも、秋の空も、よく彼女を知っていたにちがいない。本郷の病院のなかで同じ世界に住んでいた人間は、病院の外では、そのとき、私と私から遠い周囲とをつなぐ細い一本の糸のような存在になった。二人だけの世界で彼女をもっとよく知りたいと私は思った。しかしもちろんそんな世界のあるはずもなく、またたとえあっても、それは実に短い間のことでしかなかった。海辺の村、その松林、波の音と潮の香り、私の最初の女友だちは、ある日一種の幸福感で私をみたしたけれども、私の内部を決定的に変えるということはなかった。

① 「当時」の加藤周一

・「東京の爆撃のはじまる少しまえ」＝東京への空襲
　1942 年（ドーリットル空襲）～1945 年まで…いつの出来事かは不明

・「内房へ向う電車」…内房線のことか

② 執筆当時（1967 年）の加藤周一

● 「よそ者」としての意識の自覚…「「よそ者」という言葉のなかに、私と社会との関係の一切が要約されてでもいるかのように、鋭く感じた。」

・理由①…目的の違い

「国民服の人々、買出しの人々、それぞれ何かの用事で忙しそうな人々」…生活のため

加藤と「看護婦」…「海を見にゆこう」

・理由②…住む世界の違い　「海辺の村の売店、畑のなかの道、松林、潮の香り、秋の空」⇔「本郷の病院」

→**同時代の社会との距離感**…「一種の幸福感で私をみたしたけれども、私の内部を決定的に変えるということはなかった。」

⇔加藤の内部を変えたヒルダとの出会い

※『ある晴れた日に』との比較…海を見に行った部分、「看護婦」への好意が書かれる

「よそ者」とそれ以外の人々との対比…これまでの『羊の歌』でも描写

　e.g., 「桜横町」での長井邸の金網[10]、「八月一五日」

[10] 加藤周一『羊の歌』（旧版）58-59 頁

③ 現在の我々からの視点

● 「よそ者」としての疎外感は、**戦後に加藤の日本の思想をみる際の視点の一つ（内と外との違い）に**

e.g., 「日本」『大百科事典』（1988）

> ムラ人にとって所属感が重要な価値であるためには、所属と非所属、すなわちムラ人と非ムラ人（よそ者） の区別が明瞭でなければならない。特定のムラは、特定の地域に対応し、地域の境界は明瞭であって、その地域内に住むのがムラ人、地域外に住むのがよそ者である。ムラ人の行動様式は、同じムラの人間に対する場合と、ムラの外の人間に対する場合とで全くちがう[11]。

→戦時中のみならず、**戦後、加藤の日本社会をみる際の視点の一つ（内と外との違い）に**

第 9 パラグラフ（旧版 208-209 頁、改版 236 頁）

> 東京の上空にあらわれた最初の爆撃機の編隊は、高空を素通りして、郊外の軍需工場の爆撃に向った。真昼間編隊の接近が伝えられると、私たちは机上の標本と顕微鏡をそのままにして、病院の中庭へ降り、晴れた冬の空を見上げた。小さく銀色に輝く爆撃機の編隊が、平行した白い雲の糸を後ろに長くひきながら、真直に進んでゆく。「なるほど、綺麗なものだね」と誰かがいった。警報で仕事を中断される度に、私たちは、「やれ、やれ、また来たか、この忙しいのに」などと呟いていた。私はひそかに、彼らが東京そのものを襲うのは、いつだろうか、おそらく遠い先のことではあるまい、と考えていた。それは開戦の日以来、予想してきたことにすぎない。しかし私の周りでは、東京の市民が、真珠湾の勝利に酔って有頂天であったときとはうって変って、いくさに疲れ、そろそろ勝ち目のないことを感じはじめていたようである。

① 「当時」の加藤周一

・東京への空襲への危機感…空襲を想定した防空訓練は行われるも、当初の危機感は薄い

e.g., 別宮貞雄（1922 - 2012）の回想

> 相模湾から侵入した B29 の編隊は、中央線のあたりまで北上して東に向きを変えるので、井の頭の自宅のあたりは通りみちであった。最初のうちは、そう怖い感じではなかった。高い空で銀色に輝く B29 の編隊が美しくさえみえた。雪の日、こたつに入ったまま、雲を利用して低空で侵入する編隊がゴーゴーと音をたてて通っていくのを平然ときいていたりした。しかし三月に入ると十日、東京の下町の大空襲、方々が焼野原になって、もう勉強どころではなくなってしまった[12]。

・加藤の場合、太平洋戦争開戦直後から空襲を予感する…「戦争は始まったが、予期した『空襲』はない[13]」

開戦当初は喜んでいたが、いくさに疲れて勝ち目がないことを感じ始めた「東京の市民」

⇔

開戦当初から、戦争への疑問を感じていた加藤

---

[11] 加藤周一「日本」『大百科事典』（1988）平凡社〔『加藤周一著作集　第 23 巻』（1997）19 頁〕

[12] 別宮貞雄『音楽に魅せられて ： 作曲生活 40 年』（1995）46 頁

[13] 加藤周一「UN FILM RETROUVE」『加藤周一　青春ノート』270 頁

第 6 パラグラフ（旧版 209-210 頁、改版 236-238 頁）

> しかし、そのことが周囲と私との距離をせまくしたわけではない。敗色を感じることと、その感じから避け難い敗戦という結論をひき出すこととはちがう。私がほんとうに東京市民と共にあり、彼らと共に一体と巻って生きていると感じたのは、東京爆撃が現実となり、市街の三分の一が焼夷弾で一晩のうちに焼き払われた後でのことである。本郷の大学は、焼き払われた三分の一の地域のちょうど境に位置していた。上野広小路とその向うは焼かれ、本郷通りの側の街は焼かれなかった。焼夷弾は大学の木造建築に落下せず、コンクリート建築の屋根を貫かなかったから、大学の構内に火事はおこらなかった。しかしそれは爆撃機が去ってから後にわかったことである。低空から爆撃機が照明燈の縞のなかに殺到し、高射砲が射ちまくり、上野の側の空が一面の火の海を映して燃えあがっていったとき、もとより爆撃の規模を知る由もなかった。大学が焼夷弾を免れたとしても周囲を火にとりまかれれば、おそらく生きのびることはむずかしかろう、と私は考えた。何をなすべきか。できることは何もない。私は母と妹のことを考えた。世田谷の家は郊外だから、おそらく安全だろう。私はまた、このまま死ぬとしたら、私の死は何という馬鹿げたものか、ということも考えた。誰を怨むというのでもなく、戦争を呪うというのでさえもない。ただこの状況――生きるも死ぬも、要するに米国人が、太平洋の島ですでに決めてしまった計画次第であり、ただ私がその計画を知らぬだけだという状況そのものが、実に馬鹿げていて、腹立たしかった。病室の患者たちは静かだった。彼らもまた、息をのんで、運を天に任かせていたのであろう。「天」は――つまりその晩の米国人の計画は、大学と病院を救った。そして爆撃機が去り、数時間の後、私は全く別の世界のなかで生きていた。

① 「当時」の加藤周一

● 東京大空襲（1945 年 3 月 10 日）による東京帝国大学附属病院への被害

・東大構内に焼夷弾が落下し懐徳館が焼け落ち、避難民が押し寄せ、本館と一号館を開放[14]

e.g., 藤田真之助の回想

3 月 10 日には東京は下町を中心に広範囲に大爆撃を受けた。東大病院下の池の端一帯も火の海だったが、各科の当直初め居残っていた医局員総動員で懸命の防火に努めたお陰で、東病棟は類焼を免れた[15]。

※東京大空襲から敗戦（8 月 15 日）までの空襲による被害
（https://www.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/special/tokyodaikushu/）

② 執筆当時（1967 年）の加藤周一

・東京大空襲に対する加藤のいらだち…他人の思惑によって、運命を任せるしかないことへのいらだち
「若い医者」との論争で見せた同時代の社会への怒りにも通じる

要するに私は状況が、当方の思惑や感情とは関係なく、発展するだろう、といっていたにすぎないが、そんなことでみずから興奮するはずはなかった。おそらく私は島に送られた青年たちが殺されることを考え、戦争をあらためて呪い、戦争宣伝とそれを受け入れた社会に怒っていたのであろう。

---

[14] 山本唯人「東京大空襲のなかの加藤周一--「小さな空間」の歴史のために」『現代思想』37 巻 9 号（2009）176-177 頁

[15] 藤田真之助「終戦前後の佐々内科」『佐々貫之先生生誕百年記念文集』85 頁

● Q.「その晩の米国人の計画」になぜ、「天」という言葉を使った？

・日本の天の意味…中国から伝えられた道教系、儒教系、仏教系の「天」の観念（天上世界、宇宙の最高神、守護神など）が、以前からあった日神（ひのかみ）信仰と合体

→「万世一系」に基づく天皇制や、徳川将軍家などの為政者の権威を正当化する論理へ[16]

・加藤の（鍵括弧無しでの）「天」の用例…代弁や代替することのできない、唯一無二のもの

> もし九死に一生を得て、彼が還っていたら、彼自身を死地に追いこんだものに対して、中西はどういう態度をとったであろうか。私ではなくて彼が生きのびていたら、彼は何をすることを願ったであろうか。「天に代りて不義を打つ」という言葉は、無意味にちがいない。第一に、天の意志は知ることができない。第二に、たとえ知ることができても、天を代表する資格は誰にもない。しかし友人の切望は察することができるかもしれないし、代ってそれを実行する資格―はないかもしれないが、漠然としてしかし激しい誘いはあり得るだろう。私はその後、みずから退いて、羊のようにおとなしい沈黙をまもろうと考えたときに、実にしばしば中西を想い出したのである[17]。

・「内科教室」での「天」＝「その晩の米国人の計画」

→具体的、その場にいる人々の運命を左右するもの

∴既存の天の意味とは異なるニュアンス

● Q.「全く別の世界」とは？（＝焼け落ちた後の東京）

・東京大空襲に対する加藤の反応

e.g., 「焼跡の美学」（1946）

> 美学は、東京の破壊が、正に破壊さるべきものの破壊であつたと云ふ痛烈な見解を我々に強いる。〔中略〕その一切〔それまでの東京の街〕がにせ物であり、怪しげな模倣であり、根のない文明の贋造紙幣であり、葬るべく苟かの感傷にも値しないものである。想出はもう沢山だ。昔はもう沢山だろ敢えて云おうではないか。そこからは何ものも出て来なかった。出てきたのは、あの滑稽で残忍な軍国主義にすぎない。破壊さるべきものは何も東京の建物ばかりではない。〔中略〕その根源に対し、徹底的破壊を加えることになければならない。即ち、社会組織そのものを〔中略〕徹底的に民主主義合理的に変革し、日本の人民を開放して、我々日本の人民の中に理性と人間性とを育てることでなければならない。その課題の勇敢な遂行だけが、貧しい日本を、その単純にして力強い理想のために、美しく見せることが出来るであろう[18]。

→戦後の新たな世界を予見？

③ 現在の我々からの視点

・「天」としてのアメリカ…戦前の日本社会を変えることに

抽象的存在を具体的なものに落とし込む…日本文化と特質として評価

---

[16] 石毛忠「天」『日本大百科全書（ニッポニカ）』（JapanKnowledge, https://japanknowledge.com） ,（参照 2023-02-16）

[17] 加藤周一「青春」『羊の歌』（旧版）198 頁

[18] 加藤周一「焼跡の美学」『世代』4 号（1946）71-72 頁

第 6 パラグラフ（旧版 210 頁、改版 238 頁）

> 病院へは、火傷を負った人々が次々に担ぎこまれてきた。いくらか空いていた病室は忽ちいっぱいになった。寝台の数は限られていたから、床にふとんを敷き、病室の床ばかりでなく、廊下にも病人を寝かせた。看護婦のすべて、医局員のすべてをあげて、私たちは、応急の処置に全力をつくした。火傷の患者は、重傷の場合には、循環障害をおこす。応急処置といっても、局所の手当ということだけではすまない。数日の間誰もがほとんど文字どおり寝食を忘れて働きつづけた。私はその後もながく病院で働いていたが、そのときほど我を忘れて働いたことはなかったし、またそのときほど我を忘れて働く人々の仲間であったことはない。担ぎこまれた患者たちは、老人も、子供も、男も、女も、同じ爆撃を忍び、同じ生死の境に追いこまれた一種の仲間にちがいなかった。彼らは相互にたすけ合って私たちの手の足らぬところを補ってくれたし、私たちの仕事そのものが、私たちを含めての仲間のなかでの、たすけ合いに他ならなかった。爆撃機が頭上にあったときに、私は孤独であった。爆撃機が去って後の数日ほど、私が孤独でなかったことはない。

① 「当時」の加藤周一

- 東京大空襲の際の東京帝国大学附属病院での治療

・小林太刀夫の回想

その時分は医局には 7 人しかいなかった。僕なんか〔中略〕全部ひとりで診ていましたよ。大空襲のときはやけど患者がたくさん来まして、火傷だけで 2、30 人収容しました[19]。

② 執筆当時（1967 年）の加藤周一

- 『ある晴れた日に』での記述

・被害が詳細に描かれる…『羊の歌』では空襲の悲惨さではなく、自身と「市民」との距離感の変化を描写

③ 現在の我々からの視点

- 一般民衆とのともに行った、唯一の体験[20]
- 戦争への関心のきっかけの一つ[21]

e.g., 「夕陽妄語　60 年前東京の夜」『朝日新聞』2005 年 3 月 24 日

・被害者との連帯感から、爆撃のきっかけとなった戦争への関心が生まれたこと

---

[19]「座談会　佐々貫之先生を偲ぶ」『佐々貫之先生生誕百年記念文集』9 頁

[20] 山本唯人「東京大空襲のなかの加藤周一--「小さな空間」の歴史のために」『現代思想』37 巻 9 号（2009）179 頁

[21] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』岩波書店（2018）264 頁

第 7 パラグラフ（旧版 211 頁、改版 238-239 頁）

> その爆撃の後もつづけて、私はいつのまにか私の専用となった二等病室に住んでいた。夜おそくひとりで、遠い国の詩文を、鉄の寝台の上で読むこともあり、世田谷の家からはこんで来た携帯用の小型蓄音器で、わずかばかりの音盤をきくこともあった。若干の詩と、若干の音楽は、その頃すでに私の、たとえどこに住んでいても、必需品にちかいものになっていたのだろう。その部屋へ誰かが病院の外から訪ねて来るということはなかった。昼間私は部屋にいなかったし、夜の外出は、もはやいつどこで出会うかわからぬ空襲のために、危険になっていたからである。東京は戦場になり、荒廃していた。しかし本郷の YMCA に住んでいた森（有正）さんだけは、例外であった。燈火管制の黒い幕を窓におろし、扉をしめきった狭い病室のなかで、私たちはいぐさの成りゆきや、生きのびる工夫や、しかし生きのびる見透しの甚だ心もとないことなどを話し合っていたにちがいない。ある晩私たちは、セザール・フランクの交響変奏曲を聞いた。美しいものの何もなくなった東京の夜のなかで、音楽は、かぎりなく美しく、かぎりなく私を感動させた。「これはほとんどアンジェリック（天使的）ですね」と私はいった。「その通り」と森さんはいった、「ほとんどセラフィック（熾天使的）です」。

① 「当時」の加藤周一

● 森有正（1911-1976）について

哲学者。東京に生まれ，暁星中学，東京高校を経て，1938 年東大仏文科を卒業。森有礼の孫。パスカル，デカルトを中心とするフランス 17 世紀哲学・思想の研究にたずさわる。

第 2 次大戦後，東大文学部助教授在職中に渡仏，53 年に東大を辞してそのままパリに定住する。著作《バビロンの流れのほとりにて》（1957）は，書簡形式をとりながら，西欧文明との接触によって著者の内面にもたらされた変化を凝視した記録であり，この時期の森がとりくんだ思想的課題を明らかにしている。その後，《遥かなノートル・ダム》（1967）をはじめとする一連の著作で，人間の生の過程においてしだいに蓄積されてゆく動かしがたい〈経験〉を重視すべきことを説き，内面的思索力の強靱さを如実に示した[22]。

● 戦前、戦中の森有正と加藤周一との関わり

・戦時中の森有正…フランス哲学の研究に没頭、1944 年 2 月に本郷の東大 YMCA 会館に住み込む[23]

・「本郷の YMCA」、「東大 YMCA 会館」＝現在の「東大学生キリスト教青年会」

1888 年創設、1898 年に会館を建設。片山哲、森戸辰男らを輩出[24]。

※「青春ノート」には森有正に関する記述は無し

加藤が足を運んでいた東大仏文研究室のメンバーの一人[25]

この頃から親交があった？

---

[22] 菅野昭正「森有正」『世界大百科事典』, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com , (参照 2023-02-09)

[23] 木下順二「森有正よ」『展望』216 号（1976）36 頁

[24] 「東大学生キリスト教青年会略史」『公益財団法人　東京大学学生キリスト教青年会ホームページ』（http://todaiymca.or.jp/about-us/）

[25] 加藤周一「仏文教室」『羊の歌』（旧版）186 頁

② 執筆当時（1967 年）の加藤周一

● 戦後の加藤周一と森有正との関わり

・木下順二らとともに、『資本論』の読書会への参加[26]

・マチネ・ポエティックの同人誌『方舟』への参加

・加藤がフランスに留学している中（1951-1955）で、森と交友

※森は、加藤の一年前に渡仏

・森の文章に対する関心…「欧羅巴の外の世界が一人の日本人の内側にどういう風に入ってくるか、その過程の記録[27]」として、『バビロンの流れのほとりにて』を評価

※加藤の日本の内と外への関心とつながる？

→戦中戦後にかけて、加藤の関心をひいた人物

Q. 逆に、森が加藤について書いたものは？

Q. なぜ、「話し合っていたにちがいない」という曖昧な表現をした？

● フランク[28]の《交響変奏曲》への反応

・戦前のフランク受容と加藤周一

Q.どのように紹介されたのか？

e.g., 野村光一『レコード音楽読本』（1935）

ラヴェル 16 枚、ドビュッシー27 枚、ストラヴィンスキー9 枚、フランク 8 枚

→多くもなく少なくもなく。フランス音楽に興味のある人は聴いていた？

e.g., 野村胡堂「音楽の隠聖」『楽聖物語』（1941）…「曾てバッハがありし如く、深く信仰に根ざしたもので、換言すれば、厭離と欣求の音楽であり、懺悔と贖罪の音楽であった」[29]

→信仰（カトリック）、バッハとのつながりが強調される

Q. 加藤はどう受け取った？

・加藤も、フランクとバッハとのつながりは知っていたらしい[30]

---

[26] 木下順二「森有正よ」『展望』216 号（1976）37 頁

[27] 加藤周一「外と内の関係　森有正著『バビロンの流れのほとりにて』」『図書新聞』1957 年 2 月 16 日 5 頁

[28] ベルギー生れのフランスの作曲家，オルガン奏者，教育者。パリ音楽院退学後，教会のオルガン奏者を務めながら作曲に専心した。1872 年パリ音楽院のオルガン科教授に任命され，彼を慕って多くの弟子が集まった。作曲活動は 50 歳代に入って急に活発になり，円熟した傑作を次々と生み出した。とくに晩年の《バイオリン・ソナタ》（1886）や《交響曲ニ短調》（1888）をはじめとする器楽作品では，厳格な論理性と深い精神性をもつ彼独自の作風の確立が認められる。しかし，これらの傑作も，劇音楽中心の当時のフランス音楽界にあっては，ほとんど理解されなかった。寺田由美子「フランク（César Franck）」『世界大百科事典』, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com , (参照 2023-02-09)

[29] 野村胡堂『楽聖物語 ： 附:その作品とレコード』レコード音楽社（1941）315-316 頁

[30] 「音楽会の断想」『青春ノート』（1940）（https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/viewer/mp000313/seishun_note7/?p=5）

ベートーヴェンは汎ヨーロッパ的であるにちがひない。しかしそれと同程度に汎世界的ではない。
バッハがフランクを産んだと云はれるやうに、ベートーヴェンが諸井三郎を産んだと云へるであらうか？

・フランス留学中、フランクはほかの音楽とともに、特定の場所に結び付けられて回想される
e.g., 「音楽」『続　羊の歌』

あるひとつの旋律、あるひとつの音楽は、しばしば私にその旋律や音楽を聞いた特定の時や場所をよびさます。たとえば、能舞台の笛は戦時中の水道橋能楽堂を、セザール・フランクの《交響変奏曲》は東大附属病院の二等病室を、バッハの《平均律ピアノ曲集》は本郷の西方町を、ショパンの《譚詩曲》は夏の日の追分を。〔中略〕そのすべては偶然の結びつきにすぎなかったろう。しかし土地柄と音楽との間に、私はしばしば一種のつながりを感じた[31]。

※場所にズレがある？
⇒**カトリック、バッハ、オルガニストとしての森有正のイメージとのつながり？**

- 加藤の「アンジェリック（天使的）」に対する森の「セラフィック（熾天使的）」という反応

※「天使[32]」の階級…キリスト教では、プロテスタント教会においてはほとんど顧みられないのに対し、ローマ・カトリック教会では重要視され、天使は 9 階級に分けられている

階級	名前 ラテン語名
上級三隊	熾天使 angeli seraphim
	智天使 angeli cherubim
	座天使 angeli throni
中級三隊	主天使 angeli dominationes
	力天使 angeli virtutes
	能天使 angeli potestates
下級三隊	権天使 angeli principatus
	大天使 archangeli
	天使 angeli

[31] 加藤周一「音楽」『続　羊の歌』（旧版）126 頁
[32] 神に仕え、神と人間とを仲介し、人間の守護にあたることもある霊的存在。ペルシアの宗教に始まり、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教に入った。動物が神の使いを果たす例は諸宗教にもみいだされるが、神と人間との中間的な存在として天使の観念が発達するのは、前記の宗教のように神と人との断絶性が強い宗教の場合である。天使は、神の意志を伝える役割を果たすものの、人間にかならずしも好意的とは限らず、神に反逆し人間に悪事を働く天使もいて、これが、いわゆる悪魔になる。
鈴木範久「天使」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com , (参照 2023-02-09)

・森の反応
→加藤が最も下の「天使」を挙げたことに対し、
森は最上位の「熾天使」を挙げる…
親しい人との語呂合わせ的なもの？[33]

③ 現在の我々からの視点
Q. なぜこのエピソードを最後に持ってきたか？
・加藤が戦時中につながりを持てた人々…
同じ趣味嗜好を持ち、個人間での親交を持つ

表1　森有正の対人関係と心的プロセス

対人関係の層（レベル）	こころの層（レベル）	作品群
語呂合わせ的なジョーク、駄洒落、（冗談や温かいという印象を与える）	講演会などの導入など 日常の会話など 一層：駄洒落の層	日常の生活の中で知人たちとの出会い
対話的な関係の中で内閉的な思考へ（他者の存在が消える）沈潜	経験など、哲学的、神学的な話をするとき 二層：社交的関係の層	集中講義 さまざまな思想的、哲学的な対話
深刻な孤独の世界 （内的な対話者）	エッセーなどの思想的な文章を書くとき。森の思想表現のスタイルの確立。 三層：内閉的集中の層	主に思想的・哲学的エッセーなど。 『バビロンの流れのほとりにて』他。

[33] 鑪幹八郎『森有正との対話の試み』ナカニシヤ出版（2019）106 頁